

溝尾 良隆

立教大学観光学部長

エコツーリズムの理解は、旅行業者、地元関係者へ先行

観光学においては、サステイナブル・ツーリズムが重視され、推奨すべきもっとも具体的は旅行形態がエコツーリズムとされている。コスタリカ、ニュージーランド、オーストラリアなど世界各地で、エコツーリズムが盛んになり、すぐれた状況が生まれている。

日本においても、屋久島と白神山地が世界遺産に登録されてから、エコツーリズムが注目を集めるようになった。しかし、一部の地域では、サステイナブル・ツーリズムの輝かしき旗手どころか、マスツーリズムの悪い側面をさらけ出してしまっている。なぜなのか。

たとえば沖縄県の西表島の状況をみてみよう。旅行者も旅行業者も、エコツーリズムの一環として西表島に訪れていないことが問題である。短期間の安価な沖縄旅行の中に、西表島が組み込まれている。それでも、沖縄らしい自然、沖縄の中でも他では味わうことができない森林、マングローブ、ゆったりとした川に、多くの旅行者は西表島に満足している。しかし、その一方で、マングローブの倒木やイリオモテヤマネコの存亡が問題になっている。

これはあまりにも多くの旅行者が一定地区に入り込んでいることと、カヌーを楽しむためであって現地での説明は不要という旅行者が多々みられることからである。

この状況を変えるには、旅行者の啓蒙も必要ではあるが、それより前に、旅行業者が旅行商品に「エコツーリズム」と銘打つことである。エコツーリズム商品は、現地での人数は少なく、インタープリターがかならず随行して説明をする。そのために、時間もゆっくりととる。他商品と比較して、多少、料金は高い。それを理解したうえで、旅行者は参加する。もちろん、受け入れの地域でも、そのような対応を図る。西表島は本来なら島全体をエコツーリズムの島として、入り口で旅行者のコントロールをするのが望ましい。しかし、比較的規模の大きな島であり、すでにマスツーリズム対応した観光業者が多く存在するので、マスツーリズム対応の地区とエコツーリズムの地区とが競合しないようにするのが、現実の方策だろう。

国民全般にエコツーリズムの理解を図ることは必要ではあるが、いまは旅行業者と受け入れ地域が一体となって、魅力あるエコツーリズム商品をつくり、それを参加者が理解し満足することである。